

政治研究桜田會、特別功労賞受賞、『宗教と地政学から読むロシア』（日本経済新聞出版、2016年）について

2018年5月21日

法政大学法学部 下斗米伸夫

このたび一般財団法人桜田會の特別功労章という荣誉に浴した『宗教と地政学から読むロシア』（日本経済新聞出版、2016年）は正統的な政治学からはやや異端的な著作となった。国際政治学でのウェストファリア体制的な政治と宗教との峻別、とりわけ無神論国家ソ連とその後の体制を宗教と言う角度から見ようとしたこと、そして地政学と言うやや死語となっていたかに思われたカテゴリーをロシア理解に際して復活させたこと、である。

後者についてはソビエト連邦という、いわば地名なきイデオロギー国家が、ソ連崩壊によって15の地名ある主権国に転換したことから、ロシア理解に際して地政学の再興（再考）は不可避であった、という理解している。本書が書かれた直接のきっかけは、2014年からのウクライナ紛争であった。これは筆者の理解ではカトリック的世界と正教世界との「文明の衝突」に由来する。

しかしそれ以上に私の学問の初発である「ソビエト学」の見直しにも関係する。ソビエトとは何か、ソビエト連邦崩壊後あらためてその歴史的起源を問うと解けない謎が出てくる。本書ではそのソビエトの起源という謎を、ロシア正教会の源流にして最大の異端派と言うべき古儀式派という存在との関連で議論した。350年前にカトリックとの和解に反対したロシア正教保守派、いわゆるラスコリニコフのことである。ちなみに昨年3月プーチン大統領は異端派の復権を昨年、本書出版後、350年ぶりにはかった。

これまでのロシア・ソビエト史理解は、主として近代化論か、各種のマルクス主義からなされてきた。つまり宗教は直接関係ないとされてきた。これに対し筆者のソビエトの起源説は、ソビエトが教会を禁じられた異端派、古儀式派系のネットワークだという仮説である。ロシア帝国とその首都、教会に反対した古儀式派が19世紀末徐々に復活し、経済的にもロシア資本主義を支えるなど、日露戦争後の社会運動と絡んだ。ロシア革命のソビエト運動はこの証拠である。1930年代に弾圧されたが、これが今又、ソ連崩壊後に復活している。

一例を挙げると最近リバイバルしている黒澤映画の原作ゴーリキーの『どん底』（1902年）の主人公ルカ（という名前も注目）について、私の仮説を検証した研究者岩田昌征氏が、ゴーリキーのキリスト表記は正教会のそれではなく古儀式派のI s u sと言う表記であることを調べた。また10月革命の詩とは、実は古儀式派系のキリストの使徒を暗喩した詩人ブロークの「12」でのI s u sのもとにはせ参じる農民兵であった。つまりいずれも古儀式派世界と言うべきだ。こうしてみるとロシアとソ連史に「前衛絵画」を見てきた20世紀の我々の理解がむしろ一面的だったのであり、むしろそれは古いイコン画の古層に上書きされた世界だったと見る方がいいのでは、というのが筆者の見解である。